

ものがたりのかんさつかい



「てぶくろをかいに」に出てくるキツネ、「つるのおんがえし」に出てくるツル、「かもとりごんべえ」に出てくるカモ……。この町には色々な物語に出てくる生き物がたくさんすんでいます。

そんな生き物が出てくる物語を紹介した後、実際に本物に会いに行くという、おはなし会と観察会のダブル企画！1日に2度おいしい観察会を実施します。

- 日 時 3月20日(火・祝) 午後1～3時
- 集合場所 塘路湖エコミュージアムセンター
- 定員 10人 (小学生以下は保護者同伴)
- ※申し込みが必要です。
- 参加費 無料
- 申し込み 郷土館 (☎487-2332)
- 申込締切 3月19日(月)

大川のほとり

—郷土館だより(第53号)—
☎487-2332
開館時間
午前9時30分～午後4時30分

郷土館より
一羊啓上

今年の冬はとにかく寒く、雪も一度に降る量が多かったです。とける気配のない雪景色に、暖かい季節を忘れそうになりますが、朝夕の外の明るさに、春が確実に近づいていると感じます。(辻)

一党に入りました。澤脚は、尊王攘夷派の公卿として知られた三条実美に属する有力な公卿でした。徹は刀の使い手として知られ、澤脚の警護などを行っていたと思われま。

そして文久3年(1863年)、尊王攘夷運動※3が高まりを見せ、京都へ各地の攘夷派の志士たちが集結し、反対派へ「天誅」と称する暗殺が頻繁に行われるようになりました。こうした状況の中、後に「八月十八日の政変」と呼ばれる尊王攘夷派へのクーデターが起り、三条実美や澤脚を含む7人の公家は、長州藩と共に京都から追放されました。徹は澤脚と共に落ち延びたと考えられます。澤脚はその後、攘夷派の志士平野国臣と共に、但馬国生野(現兵庫県生野町)で兵を上げますが※4幕府に鎮圧され、再び長州へと逃げ延びました。

年4カ月と2番目に長い期間勤務しています。しかし、千石徹自身に關する資料は多くありません。公文書の記録や資料などを元に千石徹の生涯を追っていきます。

千石徹は弘化2年(1845年)8月17日に、新潟県三島郡五千石村大字五千石(現在は新潟県燕市)で、千石諦聴※1の長男として生まれました。徹の実家はお寺でした。徹はお寺の子どもと言うことになりませんが、時代は江戸後期から幕末へと変化する動乱の時代。腕に覚えがあった徹は実家のお寺を飛び出し、故郷を出ました。徹は勤皇党に入り天皇のために尽くすことを考えていました。徹は元々「鈴木」の姓でしたがこの頃「千石」へと改めたと思われま。これは自身の生まれた地「五千石」にちなんだもので、自らの生き方について、一つの決意を固めたのかも知れま。

徹は諸国を巡った後京都に行き、公卿※2澤宣嘉(以後澤脚)の一党に入りました。澤脚は、尊王攘夷派の公卿として知られた三条実美に属する有力な公卿でした。徹は刀の使い手として知られ、澤脚の警護などを行っていたと思われま。



釧路分監時代の千石 徹
「釧路集治監に勤務した人々」より引用

北海道集治監釧路分監(「当時は釧路集治監が名称。以後釧路分監」)の第5代の典獄(当時は分監長)として活躍した千石徹を紹介いたします。釧路集治監の典獄として在任した年数は3

くろしゅうかん

釧路集治監第五代典獄 千石 徹

釧路集治監人物伝

14

「しべちやのアイヌのものがたり」



虹別酪農センターでの展示の様子

今年1月から町内各地を巡回した歴史移動展「しべちやのアイヌのものがたり」。町内に残されたアイヌ語地名や、標茶が舞台の伝説を紹介しています。3月の開催予定会場を紹介します。

■期 間

- ～3月4日 図書館
- 3月5～9日 茶安別農村環境改善センター
- 3月12～16日 阿歴内公民館
- 3月19～26日 塘路住民センター

郷土館ミニだより

これな～んだ?

その2



3月の終わりごろから、郷土館の周りでこんな卵が見つかることがあります。

ニワトリの卵よりちょっと小さくて青い。これはいったい何の卵でしょう……？



実はこれ、アオサギの卵。アオサギの卵は青いのです。

毎年3月中旬から郷土館の裏にあるコロニー（集団巣）で子育てをしています。その巣の数はおよそ200個と釧路地方最大級。春に塘路に行くと、湖と巣のあいだを忙しく往復するアオサギを見ることができます。

- こうした動きに、徹がどの程度関わっていたのか記録には残されていません。ただ徹は澤脚を非常に尊敬しており、それは終生変わりませんでした。何らかの形で澤脚のために徹は動いていたのでしょうか。
- 明治維新後、間もなく徹は東京日比野にある明治天皇の生母中山慶子の実家である中山侯爵邸で雇われました。これは徹が剣術の達人であったためで屋敷の警護と考えられます。徹と公家の名家でもあった中山邸を結びつけたのは、澤脚であったことでしょう。
- 明治10年（1877年）、徹は西南戦争に軍属として参加した後、陸軍関係の仕事に従事しました。徹の逸話の中に、後に日露戦争などで名を残す児島源太郎と親交を育み、乃木希典を剣で打ち負かしたという話が残されています。それはこの時期のことであったかもしれませんが、徹は軍法会議の記録係を務め、明治24年（1891年）頃札幌市に移り屯田兵司令部で法官部出仕録事として勤務しました。次いで樺戸集治監で書記として務めました。
- 明治28年（1895年）4月6日に、徹は釧路分監の分監長へと就任しました。釧路分監就任時、年齢は50歳でした。この時徹の弟である学も勤皇の士として働いた後、獄政に携わっており、千葉監獄の典獄を務めていました。千石兄弟揃って監獄の施設長職※5に就いたのです。この珍しい出来事は、『獄事叢書』の時事の項で取り上げられました。
- 徹が釧路分監に着任した時は、大井上輝前や原胤昭ら、キリスト教系の獄事改革派の人々の免職や辞職が相次ぎ、集治監全体にとって変化の時期。徹には大きな舵とりが期待されていました。
- （後編へ続く）
- ※1 文献などでは千石諦聴と紹介していますが、本当は鈴木諦聴であった可能性があります。なお諦聴は「ていちょう」と呼んだと思われませんが、記録に残されていません。
 - ※2 公卿は、江戸時代まで存続した律令制の中で、国政を担う高官を指す用語で、平安時代から用いられました。公卿につけるのは、家格が高い公家でなければなりません。
 - ※3 天皇を奉る（＝尊皇）、外圧や外敵を打ち払う（＝攘夷）という2つの考え方が合わさった言葉で、幕末期に反体制運動の主翼を担った考え方式です。
 - ※4 「生野（いくの）の変」と呼ばれています。
 - ※5 地方監獄の職員と比べ、集治監の職員は上に位置づけられました。余談となりますが、千葉監獄典獄よりも釧路集治監分監長の方が役職では上位になります。